



北方民族博物館だより

No.114



H30.23 ゆりかご模型〈シンタ〉

北海道アイヌ 北海道/平取町 59.5 x 29.5 x 10.0cm (附属三脚は含まず)

川奈野一信氏製作 2018年

アイヌ語シンタ(*sinta*)。平取町在住の川奈野一信氏が、幼少時に二風谷周辺で使われていたゆりかごを再現したもの。この資料では使い方が分かりやすいように、市販の人形が用いられている。写真とは別に、設置用の三脚も附属しており、それに吊るして使用する。昭和初期頃までは農作業などの間、畑の横にゆりかごを設置し、幼児を寝かせていたという。ヒモでゆりかごの角度や高さを調整することが出来る。こうしたゆりかごは製作者が子育てをする時代には既に使われなくなっていたという。

目次 Contents

- 1 表紙 ゆりかご模型〈シンタ〉
- 2 第34回特別展「北歐サミの暮らしと工芸」
- 3 ロビー展「北の渦巻き文様」
／講座「民族文様をめぐって」
- 4 講座「北海道博物館紀行『平取町立二風谷アイヌ文化博物館』」
／講座「はじめてのアイヌ語」
- 5 ロビー展「北方海獣園によろこそ～北の人びとと海の動物たち」
／講座「捕鯨文化論再考」
- 6 INFORMATION

第34回特別展

北欧サミの暮らしと工芸

2019.7.13-10.14

はじめに

北欧からロシアのサップミ（ラップランド）とよばれる地域に暮らすサミは、トナカイ飼育や狩猟、漁労などを生業としてきた先住民族です。この地域では北欧・ロシア各国への編入などにより同化政策がすすめられました。独自の文化を保持しつつ、近年では文化復興や権利回復に関して、めざましい活動をくりひろげています。北海道のアイヌの人びととの交流ももっています。

サミの独自文化を特徴づけるのが、ドゥオッジ（duodji）とよばれる工芸品の数々です。トナカイの角や白樺のこぶ、錫糸や銀などを用いた工芸品は、実用に優れるだけでなく、サミのアイデンティティを構成する重要な要素になっています。なお、当館では、サミとしていますが、サーミ、サーメとも表記されます。

サミの人口は、当館で平成14（2012）年に講演くださったタルモ・ヨンパネン氏（当時フィンランド、シーダ博物館館長）によると、ノルウェー4万人、スウェーデン2万5千人、フィンランド9千人、ロシア2千人ということでした。



左からエノンテキオ、ウツヨキ、スコルト・サミの衣服

サミ語は、9つの方言にわかれています。もっとも多く話されているのが北サミ方言です。サミ語は方言差が大きく、天候、気候、自然、雪、トナカイ、サップミにいる他の動物

を描写する言葉が豊富なのが特徴です。本展のポスターには北サミ語を用いました。

当館では開館前から30年間にわたり北欧（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド）のサミの資料を収集してきました。本展では収蔵する約330点のなかから工芸品ドゥオッジに焦点をあて、約140点を展示しました。

サミの暮らし

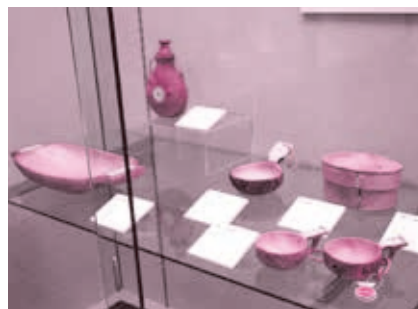
サミは狩猟、漁労、採集と小規模な農耕を行ってきました。トナカイ飼育をすることで知られていますが、大規模なトナカイ飼育が行われるようになったのは、16世紀にはいつてからのことです。トナカイは荷物を背にして運んだり、そりを引くのにもつかわれました。現在トナカイ飼育

に従事しているサミは10%以下になっています。

スカンディナヴィアでは、13世紀以降に国家が形成され、16世紀にはいるとノルウェー、スウェーデン、ロシアの国々がサップミに進出し、サミに税を課すようになりました。また、各国のサミは同化や差別を強いられるようになりますが、その事情は国によって異なっていました。こうした状況に対して、サミは権利回復の活動をおこなってきました。特にノルウェーのアルタダム反対運動をきっかけに、1980年代以降はサミの権利回復運動が盛んになってゆきます。

現在サミが政治的な要求をする際の基盤となるのがサミ議会で、各国に設置されています。また国をこえてサミ評議会が機能しています。

学校教育は、たとえばノルウェーではサミ語行政区内の児童生徒は小中学校の授業をサミ語で受ける権利が保障されています。このため、サミ語教師の養成が必要になっています。いくつかの大学でサミ語やサミの歴史を学ぶコースが開講されているほか、カウトケイノにはサミ大学が設立され、サミに限らず世界各地から学生が集まっています。



白樺こぶ製品

サミの工芸

ドゥオッジの材料となるのは、白樺やトナカイなどの自然素材のほか、他の地域からはいつてきたウール地や銀などです。

サミの伝統的な衣服と帽子は、

地域によってデザインが異なっています。特に東部ではロシアの民族衣装の影響を受け、ビーズが使われている場合もあります。

ドゥオッジは人気があり、模倣品が作られるようになりました。これに対して、サミの工芸組合では商標をつけ、伝統的な技法でサミが作成したことを保証しています。

日本でも公開された、スウェーデンのサミをテーマとした映画「サーミの血」でサミのことを知っていたという方もいましたが、初めて知ったという方が大半でした。白樺のこぶから作られたカップやトナカイの角を利用したナイフ、錫糸の刺繍が入った胸あてなど、色鮮やかで、細部にも凝ったサミの工芸品を通してサミの文化に関心をもってもらえたことと思います。

またサミの方たちには、日本でサミ文化に関する展覧会が開催されたことが興味深かったようで、ノルウェーのサミ語新聞からの取材を受けました。

（学芸グループ 笹倉 いる美）

ロビー展

北の渦巻き文様

2019.4.20-5.12



会場の様子

北海道からサハリ
ン、アムール川流域の
民族の衣服や工芸品を
みると、その多くに渦
巻き文様がほどこされ
ていることに気づきま
す。渦巻き文様自体は、
世界各地で見られ、こ
の地域でも特徴になっ

ています。

また、シカチ・アリヤン遺跡をはじめとするアムール川流域の遺跡では、岩に渦巻き文様も用いた線刻（ペトログリフ）がみつかり、渦巻きがこの地域で、空間的・時間的な連続性をもって親しまれてきた文様であることがわかります。けれども、渦巻き文様がこの地域の各民族のあいだでどのように関連しあっているのかについては、まだよくわかっていません。

今回の展示では、当館が所蔵する資料のなかから渦巻き文様が施されたものを出品し、各民族の渦巻き文様の共通点と違いを紹介しました。



文様の共通点と違いを見比べる

今回取り上げた渦巻き文様はらせんを平面上に描く文様です。真円に近いこともあれば、楕円のこともあります。巻き方は、2回未満程度が多

く、角張ったり、突起がついたり、先端が分かれたりというバリエーションがあります。

これらの地域で長くつかわれてきた渦巻き文様について、ナーナイやウリチでは渦巻き文様のなかに動物文様が入っていることがあります。ウイльтаではそうしたことを行いません。一見似ていても、構成やほどこし方には各民族のルールがあり、また同じ民族内でも文様は作り手個人のものであるとされています。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講座

民族文様をめぐる

2019.5.12 9:30-12:30

講師：丹菊逸治氏（北海道大学准教授）
中村和恵氏（明治大学教授）
笹倉いる美（当館学芸主幹）

ロビー展「北の渦巻き文様」の関連事業として講座「民族文様をめぐる」を開催しました。

はじめに、当館の笹倉が「ウイльта文様をめぐる」のタイトルで、戦後網走にも数家族が移住したサハリン先住民・ウイльтаの文様が、網走の観光業などで現在どのように使われているのかを紹介しました。

この後、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの丹菊逸治准教授と明治大学法学部の中村和恵教授に登壇いただきました。



丹菊氏

丹菊氏には「アイヌ伝統服刺繍文様の構造：北方諸民族との比較」のタイトルでお話いただきました。アイヌ伝統文様は格子状基準線に沿った一筆書き構成であるという津田命子氏による先行研究を紹介し、伝承されるのは固定された文様ではなく文様を生み出す仕組みであること、文様のパーツを並べてつくるのではなく線の交差で文様を生み出す仕組みであることなどを図示されました。さらに周辺民族との比較から、アイヌとウイльта／ニプフとの文様要素の違いの例が挙げられました。

中村氏からは「オーストラリア先住民族の現代アートにおける文様の役割」のタイトルで、オーストラリアの状況についてお話しいただきました。



中村氏

ロック・アートとよばれる岩絵や近年先住民族が描くアボリジナル・アートとよばれる分野が注目されています。古くから伝わる文様が作品に使われる場合、伝統的な文様所有の考え方が踏襲されず。一方で観光、アート業界などへの利用のされ方には課題も多いことが紹介されました。

また、こうした作品を外部から利用しようとする場合に（例えば出版物に掲載するなど）、インターネット上で許可を得ることができる仕組みができあがっており、実際的な対応もとられているそうです。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講座

北海道博物館紀行 平取町立二風谷アイヌ文化博物館

2019.5.19 10:00-11:30

講師：森岡健治氏

(平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長)

例年好評な北海道博物館紀行に、今回は平取町立二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治館長にお越しいただき、博物館の活動を中心として、平取町の魅力や当地のアイヌ文化について解説していただきました。

二風谷アイヌ文化博物館は故・萱野茂氏が収集された二風谷周辺のアイヌの民具を核として、平成4(1992)年にオープンしました。現在、博物館が所蔵している資料の中には、文化庁から重要有形民俗文化財の指定を受けているものが919点含まれています。



講師の森岡氏

講座では初めに、博物館や地域の努力によって近年、来館者が増加していることが示されました。その次に、同館が企画した二風谷のアイヌ文化を伝える映像が上映されました。昨年当館で講座を行っていただいた平取町在住のエカシ(老翁)川奈野一信氏も映像に登場し、アットゥシを作るためのシナの皮を剥ぎにいく様子などが記録されています。

アイヌ文化と言うと、アイヌの方々の過去の生活がクローズアップされがちです。100年前の暮らしが今も続いているような誤解をされないよう、現在、この地域のアイヌの方々がどのような暮らしをしているのか、そして、住民や町が、伝統を次世代に伝えていくことについて真剣に取り組んでいるということを伝えるために作られたといえます。

アイヌの過去の姿だけではなく、伝統を引き継ぎ、発展させようとしている現代の姿も伝えるという姿勢は、博物館の展示にも表れています。例えば、展示室には伝統的な技術を活かしながらオリジナリティあふれる新たな作品を生み出している現代作家の作品を紹介しているコーナーなどが設けられています。

平取町では今年の4月に博物館の向かいに、工芸家の技術を見学し、体験できる施設「アイヌ工芸伝承館ウレシバ」がオープンし周辺一帯が整備されました。博物館を含めた平取町の精力的な活動に、現地を訪れたいと思った参加者も多かったようでした。

(学芸グループ 野口 泰弥)

講座

はじめてのアイヌ語

2019.5.19 10:00-11:30

講師：関根健司氏

(平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員補)

アイヌ語に堪能な平取町立二風谷アイヌ文化博物館の関根健司氏を講師に、アイヌ語の初学者向けの講座を開催しました。講座にはアイヌ語に関心のある参加者が、楽しみながらアイヌ語を学びはじめられる工夫が様々なところに取り入れられていました。

最初に講師の演奏するギターに合わせて、童謡をアイヌ語歌詞で歌ってみる練習から始まりました。その後、アイヌ語によるラジオ体操を講師の解説の下で拝聴しました。誰もがよく知っている歌や体操ですが、改めてアイヌ語で聴く、また歌ってみるという体験は難しくもありましたが、参加者は楽しみながら練習していました。

さらにアイヌの昔話パナンペとペナンペの物語を、紙芝居形式でアイヌ語を使って講師が音読しました。トドを騙して裕福になるパナンペと、それを真似してひどい目にあうペナンペの物語に会場からは笑い声も聞こえてきました。

その次に、昨年からは平取町で始まったアイヌ語によるバスの車内アナウンスを流しながら、それぞれのバス停の地名の由来などを説明されました。それぞれの地名に込められた意味を、現地の写真を見ながら体感的に理解できるように工夫されていました。

最後に講師が準備された資料を使い、基礎的な単語、文法(語順など)や、アクセントについて解説がありました。アイヌ語を使って自己紹介をする練習も行なわれ、参加者は自分の名前を使って、アイヌ語で自己紹介ができるようになりました。

講座終了後も講師は参加者に囲まれ、様々な質問を受けていました。アイヌ語に関する参加者の関心の高さが伺えました。



ギターを手に童謡をアイヌ語で歌う関根氏

(学芸グループ 野口 泰弥)

ロビー展

北方海獣園へようこそ 北の人びとと海の動物たち

2019.5.18-6.30

会場：当館特別展示室

北方の海岸地域の人びとは、海獣類を狩猟し、その肉や脂肪、毛皮などを食物や衣類・道具を作る素材として活用してきました。このロビー展では、当館の収蔵資料により、北方諸民族と海獣との関係の一端を紹介しました。

「海獣」とは、海に住む哺乳類をまとめて呼ぶ語です。このロビー展では、海獣類をクジラ類、アザラシ類、セイウチ、ホッキョクグマの4つに分け、それぞれ関連する民族資料を展示しました（海や海水と密接に関係した生活を送っているため、本展ではホッキョクグマも海獣としました）。

まず、クジラ類のコーナーでは、クジラヒゲ製の容器やクジラ骨製のシャベルのほか、イッカクの牙、シロイルカを象った石製彫刻などを展示しました。「クジラヒゲ」とは、ヒゲクジラ類が口の中で餌を濾し取るのに使う板状の器官で、適度な弾力と強度があり、各地で工芸品の材料などとしてもちいられてきました。

次にアザラシ類のコーナーでは、毛皮製衣服やバッグ、石製彫刻などを展示しました。アザラシ類には複数の種が含まれますが、彫刻は北極海でもっとも一般的なワモンアザラシをモチーフとした作品が多いと考えています。

続いてセイウチのコーナーでも石製彫刻、セイウチの特徴である長い牙と牙彫刻、石版画などを展示しました。彫刻のなかには、「踊るセイウチ」と名付けられたユーモラスな作品もありました。

最後に、ホッキョクグマのコーナーでは、グリーンランドのホッキョクグマ毛皮製ズボン、ホッキョクグマの姿を表現した壁掛け、版画、彫刻などを展示しました。



石製彫刻<踊るセイウチ>
(イヌイト/カナダ)

展示資料の多くを占めた石製彫刻では、海獣類の様々な姿・表情が表現されており、北方に暮らす人びとの鋭い観察眼を再認識させられました。

(学芸グループ 中田 篤)

講座

捕鯨文化論再考

2019.6.9 10:00-11:30

講師：赤嶺淳氏（一橋大学大学院教授）

ロビー展の関連事業として、捕鯨や捕鯨文化をめぐる問題と今後の課題などについて紹介いただきました。

まず、クジラや捕鯨に関する基本的な知識を整理しながら、「クジラ」をめぐる問題を確認しました。国際捕鯨委員会 (IWC) によればクジラ類は世界各地に86種が分布し、それぞれ異なる特徴を持っています。しかし、人びとがクジラについて話題にすると、あたかもこれら個々の種の特徴を同時に持つ架空の「クジラ」が存在するように語ってしまうことがあるというのです。例えば「クジラは世界最大の動物である」、「クジラは最大の脳を持つ」、あるいは「クジラは絶滅の危機に瀕している」などです。実際には、これらの説明があてはまるクジラは、ごく一部に過ぎないということでした。



赤嶺氏

日本が主張する「捕鯨文化」にも同様のことが言えます。例えば、日本には長い鯨食の歴史があるとされますが、先史時代にはカマイルカとマイルカ、江戸時代にはセミクジラとコククジラ、南氷洋捕鯨ではシロナガスクジラ、ナガスクジラ、ミンククジラなどというように、時代によって利用されるクジラの種は異なっています。また、1920年代の日本各地の郷土料理を調べると、地域によってクジラの利用度には違いがあったことがわかりました。日本人とクジラとの関係を理解するためには、「捕鯨文化」と一括りにするのではなく、クジラの種や地域の多様性、変化の過程を考慮する必要があるということでした。

講座の内容は、国際政治から日本の歴史、民俗まで幅広く、また日常生活に関係する話題が含まれていたこともあって、参加者の満足度も高かったようです。かつて捕鯨基地だった網走という土地柄や、ちょうど日本の国際捕鯨委員会脱退表明の後というタイミングもあり、多くの方に参加いただくことができました。

(学芸グループ 中田 篤)

ロビー展「南隆雄 コレクション・サーベイ 北海道立北方民族博物館」

アーティスト・南隆雄氏が当館の収蔵品を題材に制作したビデオインスタレーションと、これに用いられた収蔵品で構成した展示会です。

■会期 令和元年(2019年)10月26日(土)～11月10日(日)
(期間中の休館日10月28日(月))

■会場:北海道立北方民族博物館ロビー 観覧無料

■主催:北海道立北方民族博物館、一般社団法人AISプランニング コーディネート:さっぽろ天神山アートスタジオ

■協力:株式会社東京スタジオ、倉地宏幸 助成:公益財団法人花王芸術・科学財団、野村財団

■協賛:RESULT 支援:文化庁/平成31年度文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業

◇関連事業:解説会「アーティストトーク 南隆雄 コレクションサーベイ:北海道立北方民族博物館」

■日時:10月27日(日)13:30-15:00 会場:当館講堂

■解説:南隆雄(アーティスト)

ロビー展 写真展「モンゴルの風景:遊牧世界の子どもたち」

NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがあ理事長の西村幹也氏がモンゴルで撮影した風景写真展です。

■会期 令和元年(2019年)11月23日(土・祝)～12月15日(日)

■会場 北海道立北方民族博物館ロビー 【観覧無料】

■主催 北海道立北方民族博物館、NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがあ

◇関連事業:解説会「遊牧世界の子どもたち」

■日時:11月24日(日)13:30-15:00 会場:当館講堂

■解説:西村幹也(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ理事長)

第34回北方民族文化シンポジウム 網走 環北太平洋地域の伝統と文化 4 アラスカ・ユーコン地域

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけでなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。本シンポジウムでは、環北太平洋沿岸の地域ごとに先住民文化の特徴や変遷、現状を総合的・学際的に比較・検討します。今回は、対象地域としてアラスカ・ユーコン地域を取り上げます。

■日程:令和元年(2019年)10月5日(土)・6日(日) 各日9:00～16:00 【参加無料】

■会場:オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) 大会議室[網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]

■発表者(敬称略/順不同)

U. **カンペン**(アーティスト、トウショニー・オオカミ氏族・独立研究者[カナダ])、**ベン・ポッター**(アラスカ大学フェアバンクス[アメリカ]/教授)、**岸上伸啓**(人間文化研究機構/理事)、**平澤悠**(北海道大学 アイヌ・先住民研究センター/客員研究員)、**近藤祉秋**(北海道大学 アイヌ・先住民研究センター/助教)、**是恒さくら**(東北大学 東北アジア研究センター/学術研究員)、**山口未花子**(北海道大学大学院文学研究科/准教授)、**野口泰弥**(北海道立北方民族博物館/学芸員)

◇関連事業:北方民族音楽コンサート「森と草原の響き～カンテレ&馬頭琴コンサート」

■出演 RAUMA(ラウマ)(あらひろこ[カンテレ]/嵯峨治彦[馬頭琴・喉歌])

■日時 令和元年(2019年)9月24日(火)18:00開場、18:30開演、入場無料(要整理券)

■会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) エコーホール

INFORMATION

行事報告

◆6月15日(土)はくぶつかんクラブ「フィンランドのアウトドアゲーム『モルック』で遊ぼう」(講師:菅原章子解説員)を開催しました。



うまく投げられたかな?

◆6月22日(土)講習会「白樺樹皮で編むミニマット」(講師:山辺朋子氏)を実施しました。



講師の山辺氏

◆6月30日(日)第8回ユハンス夏まつりにて夏至祭り茶会(協力:茶道裏千家淡交会網走青年部)、ポートアルバーニカフェ(協力:ポートアルバーニ・ファンクラブ)、ミニコンサート(協力:mix jam)、フラダンス(協力:レイアロハフラ網走)、モルック大会、試食会な

どを実施しました。

◆7月6日(土)はくぶつかんクラブ「ロシア風ぎょうざ『ペリメニ』づくり」(講師:中田篤主任学芸員)を開催しました。

◆7月13日(土)『犬からみた人類史』出版記念イベント「北方に生きる犬と人:動物行動学と文化人類学の視点から」(講師:近藤祉秋氏、中田篤主任学芸員、コメント:大石高典氏)を開催しました。

◆7月14日(日)解説会「特別展展示解説会」(講師:笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆7月15日(月・祝)「バイダルカ試乗体験」を開催しました。

◆7月20日(土)講習会「ローヴィックカヤンで編むポットホルダー」(講師:結城伸子氏)を開催しました。



作り方を指導する結城氏

◆7月21日(日)講習会「錫糸プレスレット作り」(講師:結城伸子氏)を開催しました。

◆7月27日(土)はくぶつかんクラブ「サミのひも織り 腕時計づくり」(講師:菅原章子解説員)を実施しました。

◆8月2日(金)研修会「アイヌの人たちの歴史・文化に関する実践授業」(講師:宇仁義和氏、床みどり氏、郷右近富貴子氏、関根健司氏、種石悠学芸員)を実施しました。

調査報告

◆7月1日(月)～7月28日(日)野口泰弥学芸員がカナダ・ユーコン準州で現地調査を行いました。

北方民族博物館だより

No.114

令和元年(2019年)9月23日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会